

幼児の運動能力からみた 幼稚園における運動遊び指導内容の検討

A Study of the Contents and actual Conditions of the Movement Instruction in the Kindergarten by the relation to Motor Ability

岡澤 哲子

Tetsuko Okazawa

はじめに

幼児の心身の健康と身体活動実施状況、および運動指導の現状と問題点については、日本学術会議の健康・生活科学委員会の二つの分科会からこの3年間で以下の報告や提言がなされている。

子どもの健康分科会(2010)は、あそびの面から、子どもの運動能力の低下や精神的疾患の増大は、群れて遊べる外遊びの減少が大きな要因であり、群れて遊べる人的・物的な社会環境の整備充実が必要であると報告している。また、身体運動の面から、運動能力の慢性的低下や二極化傾向・社会的不適応児の増大は、主として運動遊びの大幅な減少が要因であり、地域・家庭・学校が連携して、子どもの運動生活習慣に対する関心を高め、その確立に努めるべきであるとも報告している。

健康・スポーツ科学分科会(2008)は、幼児の運動能力は1986年からの10年間で大幅に低下し、その状態が2002年まで続いており、運動動作の発達も低い段階にとどまっていると報告している。そして、それらの現状は子どもの遊びの時間・空間・仲間・方法の変化が要因であり、運動能力を高めるだけでなく、その過程における幼稚園等の運動指導の現場では、幼児と生活を共にする人的環境の運動への姿勢が重要になると報告している。そして、子どもの興味・関心に基づいた自発的な遊びのかたちでの運動が、子どもの肯定的な自己概念を形成し、運動に対する意欲や自信を育むことを十分考慮して適切な運動指導を行うことが重要であると提言している。

この二つの分科会の報告および提言から、幼児の運動指導における幼稚園教育の重要性和、運動能力という視点から運動指導の在り方について探求することが必要であることが導き出される。

人は本来、自分の行動で周りの環境に自ら挑戦したい、自分の周りの環境との相互作用をできるだけよくしたいそして有能性を感じたいという性質をもっている(デン、1996)。特に、幼児期は身体運動面の有能性を感じたいという欲求が自己概念の形成と大きくかかわってくる(杉原、1986)。それが達成されると自信をもち、積極的になる。それは生活への意欲となる。そしてまた運動したくなり、運動を繰り返すことで学習が洗練され運動能力が高まるのである。すなわち運動能力というのは意欲を基本とした学習の結果である。しかし、森ら(2008)は、幼児の運動能力は、2002年と比較して2008年のほとんど変化していないと報告している。運動能力に変化がないことは、全国的に運動の学習過程に課題があると考えらるべきであろう。

運動能力からみた幼稚園での運動指導に関する先行研究の中で、吉田ら(2007)は、全国対象の運動能力測定を実施した幼稚園43園のうち、体育専門の外部からの指導者が運動指導を行っている園が81.3%であり、指導内容は種目を限定した技能向上を測ることが中心である傾向が見られたと報告している。杉原ら(2010)は、運動指導頻度の高い幼稚園のほうが有意に運動能力が低いという結果から、指導方法に問題があるのではないかと考察している、すなわち、①一斉指

導のために実際の運動時間が短い、②同じような運動の繰り返しで技能向上を図ろうとして基礎的な運動の多様なバリエーションの経験がない、③子どもたちがやりたい運動ではないので運動する意欲が育たない、この三点が運動能力向上に貢献しなかったのではないかと述べている。幼児と生活を共にする重要な環境としての幼稚園での運動指導の方法は重要である。

平成22年度に奈良県で初めて実施された「幼児の運動能力・生活習慣等調査」（奈良県教育委員会、2011）の結果、奈良県の幼児の運動能力評定値は、森ら（2008）の全国調査の標準値と比べるとやや低いこと、睡眠や食事などが規則正しく運動遊びの活発な幼児ほど運動能力が高いことが明らかになった。同調査では、教師による幼児一人ひとりの運動・生活習慣への評価と、幼児の運動能力との関係を検討している。その結果、睡眠・食事・運動習慣が整っていると評価された幼児の運動能力が高く、友達とよく遊んだり、協調性・積極性・自信のある幼児の運動能力が高いことが明確となった。

このことから、幼稚園において教師が幼児の行動をしっかりと見取りながら、運動指導を推進していくことが、幼児の運動遊びの状況の改善と運動能力向上に最も早道なのではないかと考えられる。そのためには、どのような指導方法が良いのかを明確にすることが必要である。

本研究は、運動能力からみた幼稚園での運動指導の事例から、幼児の運動指導の在り方への手がかりを得ることを目的とする。

方 法

1. 対象

平成22年度「幼児の運動能力・生活習慣等調査」（奈良県教育委員会、2011）の対象園・所の中で、運動面や生活面でさまざまな取り組みを実施し、秋または冬に再度運動能力測定を実施した7園（A園～G園とする）を対象とした。人数の内訳は表1に示した。

表1 対象幼児の人数

	男児(人)	女児(人)	合計(人)
A園	19	25	44
B園	7	1	8
C園	8	11	19
D園	17	12	29
E園	17	11	28
F園	10	13	23
G園	12	10	22
合計(人)	90	83	173

2. 聞き取り調査の実施

1) 期間：平成23年2月21日～3月10日

園長または5歳児担任へのインタビュー内容を録音し、それらを文字データに変換記録した。

2) 聞き取り項目

- ① 1回目の運動能力測定以前の子ども達の姿
- ② 1回目の運動能力測定時の様子
- ③ 測定後意図的に実施した取組や工夫
- ④ 子ども達や教師の変化
- ⑤ その他気づいたこと

3. 運動能力測定（2回目）

2回目の測定は、幼稚園の自発的な取組であったため、幼稚園によって測定種目数が異なっている。しかし、測定方法は、平成22年度「幼児の運動能力・生活習慣等調査」（奈良県教育委員会、2011）と同様に、杉原ら（2004）の測定方法が用いられた。

2008年の幼児の運動能力全国調査結果から、運動能力判定基準表が作成されている（森ら、2010）。その基準表は、男女別、6か月ごとの月齢区分別に示された5段階評定となっているため、この評定値を用いることで、性別や月齢区分に関係なく比較することが可能である。そこで、本研究では、各種目の測定値をその運動能力判定基準表に示された評定値に変換したものを「評定値」として用いた。そして、4種目の評定値の合計を幼児の運動能力を代表する値「運動能力評定値」として分析を行った。

森ら（2010）は、記録の累積百分率曲線から5段階（評定値1～5）の幅を調整して運動能力判定基準表を作成した。そのため、各種目の評定値「3」を、中央値からの一定の幅を意味する「標準的な発達」と解釈している。したがって、本研究での「運動能力」は4～20（4種目とも評定値が1の場合～4種目とも評定値が5の場合）という「運動能力評定値」で表わし、運動能力評定値「12」は「標準」であるとした。

結 果

1. A園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・よく転ぶ幼児や、ハイハイする幼児がいた。
- ②・測定を新しい物として興味をもって取り組んでいた。
 - ・子どもたちのできなかった様子を見た。
 - ・のびのびしていると思ったが緊張もしていた。
 - ・走るのは、からだ全体のバランス、考えなくてはいけないと思った。
 - ・記録が良くないなと思った。
- ③・丸太や飛石を跳ぶなど自然な活動の流れの中に環境を構成した。
 - ・特に跳びましょうとか言わずに、意識しないで毎日の生活の流れのなかで体を動かしていた。
 - ・登園直後の「チャレンジタイム」という運動時間帯を継続して実施した。
- ④・先生の張り切りが子どもたちにうつっていた。
 - ・頑張ろうといわれて頑張ろうとする子が増えてきた。
- ⑤・遊びこむプロセスが大事、結果として力が付く。
 - ・運動だけにもっていったら、運動嫌いが増える。
 - ・先生自身が運動大好きで、意識してとりくむ。
 - ・その運動が好きになることが大切だと感じた。
 - ・運動が他との競争や評価につながるが、それを意識して援助することで運動の良さを子どももの自信につなげることができる。
 - ・大人の型にはまった意識が子どものストレスを助長するのではないのか。

2) 運動能力測定結果の比較

A園は平成23年11月に立ち幅跳びのみ2回目を実施した。表2は、6月と11月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、平均の差は有意であった（ $t(38) = 2.08$ 、 $p < .05$ ）。した

がって、6月の方が11月よりも評定値が高かったといえる。

表2 評定値平均と標準偏差(A園)

		6月	11月	t
立ち幅跳び評定値	平均	3.00	2.69	2.08 *
	n	39	39	
	SD	.97	.77	

* $p < .05$

* A園では、その他園独自に、5 mダッシュや5 mジグザグ走、片脚ケンケンを7月と11月に測定している。これらの種目には全国判定基準はないが、3種目とも記録は伸びている。

2. B園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・固定遊具や運動遊具の見直しをした。年齢に応じた遊び方の工夫をしたところ、廃材を利用して作った遊具でよく遊んでいた。
 - ・「なかよしタイム」で異年齢児と遊ぶ時間があった。
- ②・興味深く取り組めた。
- ③・戸外へ積極的に出て、積極的に遊ぶ習慣づくりをした。
 - ・毎日の体操・週1回のなかよしタイムを継続した。
 - ・誕生日会のゲーム遊びにも体遊びを取り入れた。
 - ・薄着の習慣をつけるようにした。
 - ・基本的な生活習慣を見直すよう「クラスだより」で家庭に啓発した。
- ④・喜んで体を動かす事が多くなった。
 - ・砂場に川を作り、立ち幅跳びのように跳ぶ様子が見られた。
 - ・自分の得意なことに友達を誘いながら遊んでいた。
 - ・運動遊びに対する教師の意識が高まった。
 - ・教師が園庭の固定遊具に目を向けるようになった。
 - ・園の取組に保護者が理解を示し、協力的になった。
 - ・家庭でも運動遊び（キャッチボールや縄跳び）を親子で楽しむことが増えた。
- ⑤・基本の運動動作の大切さを感じた。日常の遊びに取り入れる必要がある。
 - ・再度測定して意識的な活動の成果を知りたいと思った。
 - ・継続して取り組んでいくことが大切だと感じた。
 - ・数値が伸びることが子どもたちの励みになる。
 - ・体づくりが強い心の育ちにもつながっていくと感じた。

2) 運動能力測定結果の比較（6月と11月）

表3は、6月と11月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、全測定種目とも6月と11月の評定値の平均の差は有意ではなかった。

表3 評定値平均と標準偏差(B園)

		6月	2月	t
運動能力評定値	平均	13.00	12.38	.886
	n	8	8	
	SD	2.67	3.66	
25m走評定値	平均	2.75	2.50	1.528
	n	8	8	
	SD	.89	.93	
テニスボール投げ評定値	平均	3.38	3.13	1.000
	n	8	8	
	SD	1.06	1.13	
立ち幅跳び評定値	平均	3.50	3.38	.357
	n	8	8	
	SD	.76	1.06	
両足連続跳び越し評定値	平均	3.38	3.38	.000
	n	8	8	
	SD	.74	1.06	

3. C園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・「お出かけ保育」で遠い所へ行くとよく転んでいた。
 - ・転んで歯をうってしまう子どもがいて、1年間で3人歯医者へ連れて行っていた。
 - ・21年度に、子どもたちの運動能力の実態把握をしたいと思い、けんけん運動・立ち幅跳び・30m走をやってみた。
 - ・保護者の方と一緒に「わくわく体験」を1月に1度実施してきた。ほとんどの方が参加している。
- ②・保護者から「また結果を教えてほしい」という声があった
- ③・園庭開放日を増やした。
 - ・土の山を増やした。
 - ・10月の運動会后、登園後に園庭を毎日10分間走った。
走った後、クラス別や2学年で鬼ごっこや集団遊び、挑戦する固定遊具など、運動遊びを取り入れた。
 - ・11月の休日参観に、親子でできる遊びを工夫して親子遊びを取り入れた。
 - ・運動会でも綱引をしたり、親子遊びの中でも大縄跳びをしたりと運動遊びが多くなった。
 - ・園長便りを配布し継続的に取り組んでいることを保護者に対して発信してきた。
- ④・10月11月にずっと歩きに行っていたら転ばなくなった。「お腹すいた」と言って帰ようになった。
 - ・走ることが好きになりタイムを取ることが楽しみになっていた。
 - ・「お出かけ保育」のお散歩が大事だとは思っていなかった。以前は行事が忙しくなると、行かなかったり、行く数が減ったりしていたが、「お出かけ保育」をはじめると、子どもから「先生僕の家はいつ行くの？」などの声があり、保護者の方からも「いつあるんですか？」という声があり、そうすると忙しくても行くことになった。
 - ・保護者が熱心にやると子どもにも影響があった。子どもも「やりたい」と言い出した。
 - ・車や自転車での送迎も減り、歩いてくる子どもが多くなった。
 - ・今まで、ふにゃっとしていたり、よくぐずったりしていた子どもが、テニスボール投げで投げることができた。すると、子どもたちみんなが「〇〇くんすごい！」となり、今まで

「はやくしようね」の言葉がけが必要だったり、やる気もあまりなかったのだが、みんなに褒められて、すごくいい表情になった。「すごいね」と言葉がけをすると「やればできるねん」と言い、担任の先生が、「じゃあ教室まで早く帰れるかな」というと早く帰れたりして、たったひとつのその機会ですその子は変わった。他の生活面にも影響があって、やはり友達や先生に褒められることは大事なんだなと感じた。ちょっとずつできることが増えていった。測定がいいきっかけとなった。

⑤・環境づくりが大切だなと思った。

- ・指導者や環境が子どもに非常に影響する。
- ・教師がやらないと子どもたちの意識も保護者の意識も変わらないと感じた。
- ・先生がきちんとひとりひとりをみてやっていかないと、子どもがつぶれてしまう。先生の主導型で子どもの指示待ちをつくってしまうのではなく、子どもの想いを引き出してやるのが大事。背中を押してやることも大事。

2) 運動能力測定結果の比較（6月と2月）

表4は、6月と2月の評定値の平均及び標準偏差である。

25m走の評定値の平均は、6月より2月の方が高かったが、t検定の結果、有意ではなかった。両足連続跳び越しの評定値では、6月と2月の平均の差は有意であった（ $t(18) = 2.388$ 、 $p < .05$ ）。したがって、両足連続跳び越しは、2月の方が6月よりも評定値が低かったといえる。

表4 評定値平均と標準偏差(C園)

		6月	2月	t
運動能力評定値	平均	12.58	11.89	1.998
	n	19	19	
	SD	3.83	3.68	
25m走評定値	平均	2.89	3.21	-1.455
	n	19	19	
	SD	1.20	1.32	
テニスボール投げ評定値	平均	3.05	2.79	1.045
	n	19	19	
	SD	1.31	1.08	
立ち幅跳び評定値	平均	3.32	3.00	1.679
	n	19	19	
	SD	1.20	1.05	
両足連続跳び越し評定値	平均	3.32	2.89	2.388 *
	n	19	19	
	SD	1.11	.88	

* $p < .05$

4. D園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・天気のいい日は必ず子どもたちに「外へ行こう」と言って、固定遊具は頻繁に使っていた。
 - ・とりたてて、「この運動」というのではなく、普段の外遊び（ゲーム遊びやボール など）を天気の良い日は保育のなかにどんどん取り入れていた。
 - ・子どもたちが自分たちの思いのままに遊びの構成をしていた。
 - ・なかなか鉄棒に跳びつけない子がいたら、子どもたちがジャンピングできるものを鉄棒の下に持ってこれば簡単にできるよ、という発想が子どもたちから出ていた。
- ②・まっすぐ走ることが5歳にしても難しいということを感じた。
 - ・測定が終わって子どもたちは「またやりたい」と言っていた。

- ・測定というのを意識しすぎず、取り組んでいるという感じであった。
 - ・線が引いてあるグラウンドを見て、「小学校だけじゃなくてここも運動能力測定するんですか」という声が保護者からあった。
 - ・両足ジャンプは性格的なことが出るなと感じた。
- ③・運動会のリレーに向けた取り組みのなかで、教師が子どもたちにどうしたら勝てるか、という課題を与えた。走っている様子をビデオ撮影して、それを子どもに見せた。
- ④・運動会でのリレーの取り組みがかなり燃えた。走ることやタイムを測定するとなると目を輝かせるようになった。2回目の測定の際は、走り終わって「先生どうやった？」と聞く子どもがすごく多かった。走るだけでなく、意欲がすごくでてきた。運動以外でもより積極的になった。
- ・チームで作戦会議・話し合いをしていた。速く走る子の走り方を見たり、家の人に走り方を聞いたりする姿が見られた。
 - ・ビデオを見て、足の速い子は、手を大きくふる、足の運びがはやいなどの気づきがあった。子どもたちは「リレーの練習がしたい」と言い出すようになり、練習後も「もう1回、もう1回」と、とても意欲的になった。
 - ・練習中にアンカーをして負けてしまい、大泣きしてしまった子どもがいたが、子どもたちが「負けることもあるから、次頑張ろう」「私だって遅かったときもあった」などの声かけをしていた。泣いていた子どもも、泣き止み、みんなの暖かい気持ちを受けて、もう一度頑張ろうとなっていた。
 - ・運動に取り組む始めてから給食をよく食べるようになった。
 - ・走ることでは、「〇〇くんの真似をしたら速くなる」というのと同じように、給食でも「〇〇くんの食べ方を真似したらはやく食べられた」など、見て真似る、ということが増えた。はやく食べることができたら、うれしくて、真似させてもらったから食べられた、となり、次自分より遅い子に伝言ゲームのように伝言していた。友達のことをよく見ていて、友達に「今日は昨日よりも歯磨くのはやかったね」など、友達同士での認め合いの声かけがある。決めた時間までに全員が食器を片付けられたら、みんなが喜んでいる。友達に言われても素直に聞ける関係がある。子ども同士で、フォローが必要な子のフォローがすごく上手になっている。クラスみんなそれぞれが自信を持っている。できなかったことができたら素直に喜ぶ姿が見られる。
 - ・保護者が丁寧に走り方を教えたり、親子のふれあいがあったり、「〇〇ちゃんはお父さんにこんなことを教えてもらったよ」ということを家に持ち帰って話したりなど、家庭にも広がりがあった。
- ⑤・ボール投げは、大きなボールは（普段から）投げたりしているが、小さなボールは、手首のスナップを効かす、からだの反動をつけるとかが必要。紙飛行機の飛ばし方を教えてもらったときに、スナップを効かし方が分かったり、それがだんだんボール遊びにつながったり、ボール遊びの技術だけでなく、その前の段階の遊びにもつながっているということを感じた。
- ・できなかったことができるようになると、興味を持つし、(子どもたちの間で)「これでやれば簡単にできるよ」ということが伝言ゲームの様に伝われば、鉄棒に興味を持つ子どもが増える。みんなの中に教えあいがある。そういうことを子どもから教えてもらった。
 - ・子どもたちの運動能力を見直すいい機会になった。普段の活動の中では見られないことを、

運動能力測定をやってみて分かることが多かった。

- ・励ましあい、心が育ってきたんだなと感じた。運動会までにいろんなドラマがあって、本番だけでなく、プロセスが大事だなと感じた。
- ・生活の意欲が食欲と繋がっていると感じた。

2) 運動能力測定結果の比較（6月と11月）

D園は平成23年11月に25m走のみ2回目を実施した。表5は、D園の6月と11月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、6月と11月の評定値の平均の差は有意であった（ $t(27) = -3.29$ 、 $p < .01$ ）。したがって、25m走は11月の方が6月よりも評定値が高くなったといえる。

表5 評定値平均と標準偏差(D園)

		6月	11月	t
25m走評定値	平均	2.82	3.57	-3.29 **
	n	28	28	
	SD	1.06	1.03	

** $p < .01$

5. E園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・自由時間に保育室内で遊ぶ子が多かった。
 - ・草履ばきをしている。
- ②・1回目は練習もなくなんとなくやった
 - ・ボール投げを見ていて、走るのとはできなくても野球大好きでお父さんとキャッチボールをしている子が良く投げている。
- ③・戸外での運動遊びを増やした
 - ・小学校の校庭とつながっているので、小学校の遊具を使ったり体育の授業を見させてもらったりしている
 - ・園の栽培活動に力を入れた（親子収穫、料理）。
- ④・2回目は1回目より意欲的で記録をのばしたいと思う子が増えている。
 - ・鬼ごっこが大好きで毎日走り回っている。
 - ・固定遊具にも意欲的、雲梯、縄跳びにも取り組む。
 - ・難しい運動遊びにも積極的に取り組むようになった。
 - ・外遊びが大好きになった。
 - ・誘ってもいかない子はいない
 - ・足を使ってするものがすごく伸びている。
 - ・よく食べるようになってきた。
 - ・嫌いなものを食べるようになってきた。
 - ・家庭ではあまりでないものも食べられるようになってきた。
 - ・ひじき、うのはな、キュウリの酢もみなど、家でも作る家庭がでてきた。
 - ・園の栽培活動で親子の会話が増えた。
- ⑤・意識することで変わる。

2) 運動能力測定結果の比較（5月と1月）

表6 評定値平均と標準偏差(E園)

		5月	1月	t
運動能力評定値	平均	11.11	11.37	-.582
	n	27	27	
	SD	2.39	2.53	
25m走評定値	平均	2.59	2.70	-.681
	n	27	27	
	SD	.69	.82	
テニスボール投げ評定値	平均	3.41	3.07	2.082 *
	n	27	27	
	SD	1.05	.96	
立ち幅跳び評定値	平均	2.11	2.33	-1.363
	n	27	27	
	SD	.70	.78	
両足連続跳び越し評定値	平均	3.00	3.26	-1.568
	n	27	27	
	SD	.83	1.10	

* p<.05

表6は、E園の5月と11月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、テニスボール投げの評定値の5月と1月の平均の差は有意であった（ $t(26) = 2.082$ 、 $p < .05$ ）。したがって、25m走は5月の方が11月よりも記録が良いといえる。その他の3種目及び運動能力評定値の平均は、6月より2月の方が高かったが、t検定の結果は有意ではなかった。

6. F園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・転びやすかった。
 - ・運動能力が低かった。
 - ・登降園が幼稚園バスなので、歩くことが園の中だけになる。そのことが子どもたちの運動能力に影響しているのではないかと感じていた。
 - ・朝食は96%食べているが、内容までは意識していなかった。
 - ・体が小さく食も問題であった。
 - ・給食を食べたら寝る子がいた。
- ②・話をしっかりきいていた。
 - ・ボールを投げられない。
 - ・記録でなく、体のしなやかさが目立った。
 - ・速い、遅いなど人の様子をよくみていた。
 - ・ストップウォッチに興味をもった。
- ③・運動会を一つの目安とした。
 - ・リレーは4歳の時に5歳児のリレーをみている。また小学校が5月にリレーをするので見に行った。
 - ・帰るとすぐ真似をして、小さい組も巻き込んだ。
 - ・23人全員が3チームにわかれリレーをすることにした。力加減を同じにするよう子ども達が適当に分かれ、すこしずつ気づきながらチーム編成をした。走る順番も作戦を立てさせた。

- ・園の敷地ではないが、隣接する芝生広場を借りてリレー遊びをさせた。地域の助けを借りた。
 - ・チャレンジタイムの実施。朝の片づけの後に運動遊びをして保育室に戻るといった試みを行った。鉄棒の前回りをいれるなど園庭にあるもので継続した。継続ができることを大事にした。
 - ・時には、チャレンジタイムを少し中断して、子ども達が「せえへんの」と意欲を見せたときに再開するなど工夫した。
 - ・リズム室に鉄棒を常設した。
 - ・参観の時リズム室でボール遊びを行った。
 - ・興味を持っているストップウォッチを使った。
 - ・長距離のランニングでは、10番まで番号を付けるが、後はよく走ったねと褒めた。
 - ・サッカー遊びでは、ゴール間が広いと準備が大変で、あまり取り組まないが、狭くするとよくやってがんばる。
 - ・山頂にお地藏さんがある園の前の山をみんなで登った。10分で帰れるのだけど毎日はいかないようにして、また行きたいという思いを残すようにした。
- ④・勝つことと負けることにすごい意識をした。
- ・キックベースボールを「サッカー野球」と子どもたちが名づけた。
 - ・タイヤ跳びでストップウォッチを使って時間を自分たちで測るようになった。
 - ・数が少ないほうが速い、数多いほうが遠いなど数を見ることができるようになった。実感してきた。
 - ・作戦や意見を言うことで、みんなとすることを楽しんだ。
 - ・他の生活場面でも意欲的になった。
 - ・少しの時間でも外に行って遊びたい子どもが増えた。
- ⑤・できない子もいるが、できない子も遊びのなかならやってみようとする。
- ・みんなとするならいい。
 - ・少しずつするなら継続できる。
 - ・リレーは幼稚園なりのやりかたで、走ることとバトンを渡すことが楽しい。
 - ・地域の課題は幼稚園の課題、幼稚園の課題は地域の課題という意識をもっている。
 - ・環境がいいということをいかせる。
 - ・走りまわっているからいいと思わないで、意識してとりくむ。
 - ・プロセスに価値がある
 - ・教師が見えたことがあり、それを大事にしたい。
 - ・家庭との連携が一番難しい（協力度は両極端）。
 - ・保護者の意識改革ではなく教師の意識改革だと思った。
 - ・運動はとても知的な遊びであることがわかった。
 - ・先生がモデルなので先生が運動好きなのが大切だ。

2) 運動能力測定結果の比較（5月と1月）

表7は、F園の5月と1月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、運動能力評定値の5月と1月の平均の差は有意であった（ $t(19) = -6.568$ 、 $p < .001$ ）。立ち幅跳びの評定値の5月と1月の平均の差も有意であった（ $t(19) = -6.185$ 、 $p < .001$ ）。また両足連続跳び越しの評定値の5月と1月の平均の差も有意であった（ $t(19) = -2.773$ 、 $p < .05$ ）。したがって、運

動能力評定値は、1月の方が5月よりも高いといえ、立ち幅跳びと両足連続跳び越しの2種目についても、1月の方が5月より記録が伸びているといえる。25m走とテニスボール投げも、5月より1月の方が平均値が高かったが、t検定の結果は有意ではなかった。

表7 評定値平均と標準偏差(F園)

		5月	1月	t
運動能力評定値	平均	10.60	12.50	-6.568 ***
	n	20	20	
	SD	1.82	1.57	
25m走評定値	平均	2.80	2.95	-.767
	n	20	20	
	SD	0.70	0.69	
テニスボール投げ評定値	平均	2.95	3.10	-.767
	n	20	20	
	SD	1.15	0.91	
立ち幅跳び評定値	平均	2.15	3.20	-6.185 ***
	n	20	20	
	SD	0.99	0.83	
両足連続跳び越し評定値	平均	2.70	3.25	-2.773 *
	n	20	20	
	SD	0.66	0.72	

*** p<.001,* p<.05

7. G園の事例

1) 聞き取り内容

- ①・病院へのタクシー代が不足するほど、遊びのなかで怪我をする子どもが多かった。
 - ・平地でもよく転んでいた。
 - ・足が弱かった。
 - ・「しんどい」「朝ごはん食べてないからおなか空いた」などぐずる子どもがいた。
 - ・5歳児は全体的に幼く、特に男児は軟弱な印象で、意思表示もはっきりできない子がほとんどだった。
- ②・5歳児の男児の保護者が、結果が良くないのではないかと不安をもっていた。
- ③・毎日隣接の建物の周りの10分間ウォーキングを継続した。
 - ・週1回「スポーツデイ」を設け、意識的に運動遊びや運動の基礎を指導した。
 - ・運動会の内容を再考した。
- ④・5歳児が意欲的になった。
 - ・運動場面以外での意欲も変わった。ふにゃっとしていた子どもがシャキッとするようになった。
 - ・「お腹がすいたら歩けないから朝ごはん食べていく。」と子どもが自分から言い出した。
 - ・怪我がなくなった。幼稚園から一度も病院へ連れていっていない。かすり傷程度ですんだ。
 - ・よく食べるようになった。給食の量が増え、偏食が減った。ウォーキングをすると喉が渇き、飲めない牛乳を飲むようになった。
 - ・運動が嫌いになる子どもはいなかった。楽しんでやっていた。
 - ・インフルエンザの学級閉鎖がなかった。
 - ・スポーツデイとなると、教師も意欲的になった。
 - ・子どもが意欲的になったり、元気になったり給食もよく食べたり、という体が強くなったという結果が見えたことで、保護者は協力的に、幼稚園のことや先生に理解を示すようになった。

- ・保護者にわかりやすい週案を作成して配布した。
 - ・結果が目に見えることにより、「先生は子どもたちのためにこれだけのことをやっているんだ。」と保護者が感じ、保護者が変わった。
- ⑤・運動能力を高めるための遊びをすることによって、子どもはできないことができるようになる。そういったことが増えてくると、子どもの自信は大きくなり、意欲的になる。

2) 運動能力測定結果の比較（6月と11月）

表8は、G園の6月と11月の評定値の平均及び標準偏差である。t検定の結果、テニスボール投げの6月と11月の平均の差は有意であった（ $t(20) = -3.162$ 、 $p < .01$ ）。立ち幅跳びの評定値の6月と11月の平均の差も有意であった（ $t(20) = 5.587$ 、 $p < .001$ ）。したがって、テニスボール投げと立ち幅跳びは、1月の方が5月よりも記録が伸びているといえる。25m走と両足連続跳び越しの2種目および運動能力評定値も、11月の方が6月より平均値が高かったが、t検定の結果は有意ではなかった。

表8 評定値平均と標準偏差(G園)

		6月	11月	t
運動能力評定値	平均	10.62	10.76	-.429
	n	21	21	
	SD	1.96	1.95	
25m走評定値	平均	2.90	2.95	-.252
	n	21	21	
	SD	0.94	0.80	
テニスボール投げ評定値	平均	2.81	3.48	-3.162 **
	n	21	21	
	SD	1.08	1.03	
立ち幅跳び評定値	平均	2.10	1.33	5.587 ***
	n	21	21	
	SD	0.54	0.48	
両足連続跳び越し評定値	平均	2.81	3.00	-.940
	n	21	21	
	SD	0.68	0.77	

*** $p < .001$, ** $p < .01$

8. 全園の測定結果

表9は、2回目の測定で全4種目を実施しなかったA園とD園を除いた、5園のデータの平均と標準偏差である。

その結果、運動能力評定値も他の4種目もすべて、1回目よりも2回目の平均値の方が高かったが、t検定の結果は有意ではなかった。

表9 評定値平均と標準偏差(全園:A園、D園を除く)

		1回目	2回目	t
運動能力評定値	平均	11.35	11.66	-1.567
	n	95	95	
	SD	2.68	2.66	
25m走評定値	平均	2.78	2.89	-1.330
	n	95	95	
	SD	0.88	0.93	
テニスボール投げ評定値	平均	3.11	3.12	-.104
	n	95	95	
	SD	1.13	1.01	
立ち幅跳び評定値	平均	2.47	2.52	-.411
	n	95	95	
	SD	1.02	1.09	
両足連続跳び越し評定値	平均	2.99	3.14	-1.620
	n	95	95	
	SD	0.84	0.91	

考 察

1. 各園の変化からの考察

1) A園の事例より

A園は、2回目の運動能力測定の種目が立ち幅跳びのみであったので、全体として運動能力が高まったかどうかは明確にできない。A園は「チャレンジタイム」という朝の自然な運動時間を保育の中に取り入れ継続してきており、それが子どもたちの生活の中に自然に組み込まれ、習慣化していることが特徴である。そして、6月の運動能力測定時に、教師が運動時の子どもたちの個々の体の状況をしっかりと見とることで、意外にできていない子どもたちの様子を知った。そのため、教師がそれまでの試みを見直し、張り切って子どもたちの運動指導にあたった。教師自身も運動好きになることで、子どもたちの運動好きや自信につなげていける保育が可能になることを意識したと考えられる。

2) B園の事例より

B園は、運動能力評定値が高まったとは言えない。B園は5歳児の園児数が8名で少ないため、測定は3歳児も4歳児も含めて実施した。そのため、園の楽しい行事として全園児で興味をもって取り組めた。また、教師は、子どもの基本の運動の大切さや、体づくりが子どもたちの強いところの育ちにつながっていることに気づき、園児数の少なさからくる子ども同士の関わりの少なさをカバーするために、運動遊具の工夫や手作りを行ったり、異年齢との活動を多く取り入れたり、戸外に積極的に遊ぶ習慣づくりを心がけたりした。そのことが、子どもたちや保護者の変化につながったと考えられる。

3) C園の事例より

C園では、大きく運動能力が高まったとはいえない。しかし、C園では、子どもたちが転んでけがをすることが多いことを懸念し、運動能力測定をきっかけに、毎日園庭を走ったり、長距離を散歩する「お出かけ保育」に一層力を入れたり、園庭開放日を増やしたりする努力をした。幼稚園のそのような努力が、保護者に理解され、子どもの運動に関する保護者自身の意識も高まり、車や自転車での送迎が減り徒歩通園が増えるという変化が見られている。また、それまで運動面で自信がなかった一人の5歳児の事例は、運動能力測定で友達にほめられたことをきっかけに、それ以外の生活の面でも自信が出てきたことを目の当たりにして、教師が行動しないと子どもたちの意識も変わらないと教師が気づいた事例である。

4) D園の事例より

D園は、運動会のリレー練習をきっかけに走ることに力を入れたことが特徴である。25m走のみ2回目の測定を行い、2回目の評定値の平均が有意に高く、取り組みの効果があったといえる。運動能力測定以前にも運動遊びに取り組んでいたが、タイムを測定することで、子どもたちの走ることへの興味が高まった。そして、子どもたちがリレーでもっと速く走りたいと意欲を高めたのは、子どもたちが走っている様子をビデオ撮影して、子どもたちにみせられるようにした教師の援助が効果的であったと考えられる。どうやったら勝てるかという課題に対して、ビデオをみながらの発見やチーム作戦会議での意見発表などの過程を経て、リレー練習へのめり込んでいったと思われる。その過程を経た子どもたちには、アンカーで失敗した友達への思いやり行動が観察されている。そして、思いやり行動が、給食の場面でも見られるようになってきたことは、運動遊びの取り組みの中で培われた自信が、心の安定を生んだことによると考えられる。教師も、

子どもたちの励まし合いながら育つ様子を見て、結果だけでなく、それまでのプロセスが大事であるということに気づいている。

5) E園の事例より

E園の子ども達は、自由遊び時間でも保育室内で遊ぶ子どもが多いことが課題であった。しかし、隣接する小学校の校庭とE園の園庭とが地続きに向かい合っていることを利用して、戸外遊びを増やしたり、小学校の遊具を使ったり、小学校の授業見学をしたりしたことで、子ども達の運動遊びの機会が増えたのだと考えられる。特にE園の子ども達が好きな鬼ごっこや固定遊具での遊びは、幼児期に必要な多様な動きを伴う有効で魅力的な遊びであるため、有意ではなかったが、運動能力評定値が高まったと考えられる。保護者の協力のもと、園での栽培活動に力を入れたことと、運動の取り組みの効果が相まって、子どもたちの食の改善にもつながったと考えられる。また、E園の子ども達は、室内では親指と人差し指で鼻緒を挟む形の草履ばきで過ごしている。毎日の草履ばきで得られる、つま先や足指を拘束されない感覚、足の裏で床をとらえる感覚が、25m走や立ち幅跳び、両足連続跳び越しに必要な下肢の感覚の向上を促進しているのではないかと考えられる。

6) F園の事例より

F園は、子ども達全員がバス通園であった。そのことが運動能力の低さを生じさせている原因ではないかと教師は感じていた。そのために、運動会のリレーに関しては、23人全員リレーで3チームに分けて競うことを提案して子ども達のやる気を促した。そして、園に隣接する芝生の広場を地域から借りて使用可能にする、起伏のある園の周りの土地を生かして長距離ランニングをする、裏山の山頂まで登るなど、園の環境を有効に生かしている。また、環境を整えるだけでなく、チャレンジタイムや裏山登りも毎日でなく、時々意識的に休んで子どもたちのやりたいという言葉を引き出したり、1回目の測定の時に興味を持ったストップウォッチを遊びの中で使えるようにしたりするなど、子どもたちの意欲を高めることに、きめ細かく対応できていたと思われる。その成果が、2回目の運動能力評定値が有意に高まったことに表れていると思われる。キックベースボールを子ども達自らが「サッカー野球」と名付けたり、タイヤ跳びでストップウォッチを使って測定遊びをしたりなど子どもたちが積極的に外での運動遊びに取り組んでいた。教師の意識改革がもっとも大事であることや地域ぐるみで子どもたちの育ちを援助していくプロセスに最も価値があるなどの教師の気づきがみられる。

7) G園の事例より

G園では、怪我をする子どもや、朝からしんどさを訴える子どもが多いことが課題であった。G園の取り組みの特徴は、朝の10分間トレーニングを毎日継続したこと、週1回のスポーツデイを継続したことが特徴であると思われる。継続することが、子ども達の自律的な生活リズムを取り戻し、保護者の理解をも得られることに繋がったと思われる。

課題であった子ども達の怪我が減ったことだけでなく、運動場面以外でも子どもたちが自信にあふれている態度になってきたと教師は感じている。保育のねらいが達成されようとしていることを教師が実感できた取組であったと思われる。

2. 7園の事例から

表9が示す通り、7園の評定値の平均は有意ではないが、4種目とも高まっている。そして運動能力を代表する運動能力評定値も高まっている。7園の取り組みから導き出される、運動能力からみた幼稚園での運動指導の在り方への手がかりは次の6点であると考えられる。

1) 現状から課題を見つけスタートする

7園とも園の課題を意識し、それにどう取り組んでいくのかを考え実行している。特に、どんな運動遊びをしているかという状況だけに満足しないで、その遊びの中で子ども一人ひとりの今まで見えていなかった体とこころの状態を把握し、その子自身だけでなくクラス、学年、園単位の課題を常に見つけだすことから始めることが必要である。

2) 教師が意識し変わると子どもが変わる

まず教師が意識して行動を起こさなければならない。7園の教師は、運動指導に積極的に取り組む取り組みの中で、幼児期の運動遊びが生活の意欲にどのように関連しているかに気付き実感している。そして、教師自身が運動好きにならなければ、運動の面白さを子どもに伝えることはできない。教師が運動が苦手であれば、戸外遊びに誘うことを積極的にはしないであろう。それは子ども達の状況の改善には結びつかない。

3) 運動遊びを日常保育に位置づけ継続して実施する

7園とも運動能力測定をきっかけに園全体が活気づいてきたと思われる。測定結果だけを見るのではなく、測定をすることで教師の意識や子どもの意欲を高める方法で取り組むことが必要だと考える。また取り組みの成果であるかどうかを見極めるためにも、運動能力測定は年間計画の中に位置づけることが必要であろう。

また、園環境を工夫したり、園独自の良さを生かす工夫をして、運動遊びを、無理のない自然な形で日常保育に位置づけることが継続して実施できる要素となる。

4) 遊びこむプロセスを大事に見守る

運動能力は学習の結果であるから、子どもたちが運動遊びを遊び込んで、その運動が好きになって、さらに遊び込んだ結果としての指標である。トレーニングのように運動技能だけにもっていったら運動嫌いが増える。どのようなプロセスをたどるかをじっくりと見守りながら適切な援助をして、子ども達が遊びの達成感を感じるようにすることが必要であろう。

5) 幼児の主体性や自律性を引き出す試み

4)との関係が深いのが、遊び込むことで「もっとこうしたい」「こうしたらどうか」「こうになりたい」というような主体性や自律性を引き出すことができる。7園の取り組みの中では、C園の幼児の事例や、D園やF園のリレーの練習の事例、F園の多様な運動プログラムでの援助が特徴的であろう。また運動での意欲は、生活の意欲や食欲とつながっているので、他の生活面（人間関係）における自主性や自律性にも影響を及ぼすと思われる。

6) 園の努力が保護者への理解を生む

家庭との連携が一番難しいが、園が努力していることを積極的に見せることや、子どもが変わったことを見せることで家庭の理解は得られていくと考えられる。保護者が運動する機会が増えるよう参観日や運動会の内容を再考したり、園庭開放日を増やしたり、登園・降園時に継続した取り組みをすることも効果的である。

まとめ

本研究は、運動能力測定と意識的な運動指導を実施した7園の事例を検討し、運動能力からみた幼稚園における運動指導の在り方への手がかりを得ることを目的とした。その結果、次の6点の手がかりが得られた。

- 1) 現状から課題を見つけ取り組みをスタートすることが必要である。
- 2) 教師が意識が変わると子どもが変わることを信じて行動を起こす。
- 3) 運動遊びを日常保育に位置づけ継続して実施する。
- 4) 遊びこむプロセスを大事にして子どもを見守る。
- 5) 幼児の主体性や自律性を引き出すことを試みる。
- 6) 園の努力が保護者への理解を生むので、園の取り組みを保護者に知らせていく。

文 献

- デシ, E. L.: 安藤延男・石田梅男訳 (1996) 内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ—, 誠信書房: 82-83.
- 奈良県教育委員会 (2011) 平成22年度幼児の運動能力・生活習慣等調査: 4-35.
- 日本学術会議健康・生活科学委員会健康スポーツ科学分科会 (2008) 提言 子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備: 8-9.
- 日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康分科会 (2010) 報告 日本の子どものヘルスプロモーション: 11-12.
- 杉原隆 (1985) 幼児の運動あそびに関する有能さの認知とパーソナリティの関係, 体育学研究30: 25-35.
- 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中元浩揮・近藤充夫 (2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係, 体育の科学60 (5): 342-343.
- 杉原隆・森司朗・吉田伊津美 (2004) 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析, 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 吉田伊津美・杉原隆・森司朗 (2007) 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 58:77.